

ヨーロッパとその国々

近代ヨーロッパ思想史を背景にしたEUの形成について

Europe and its Nationstates

The current European Union reflected in a Selection of modern European Ideologies.

Jan Gerrit STRALA

シュトララー ヤン ゲリット

ヨーロッパとは何か。そして、ヨーロッパの精神とは何であるのか。これらの問いは、次に挙げる3つのうちのいずれかと、密接に関係している。1. ヨーロッパ出現の理由と推進要因は何か。2. 現在のような欧州連合という形態に至るにあたり、どのような意図があったのか。3. 今日までヨーロッパを牽引してきた概念や勢いのある思想から、将来のヨーロッパ像をどのようにして導き出すことができるか。この論文では、これらの問いに焦点を当てるため、ヨーロッパが欧州連合に至るまでに辿った直線的な歴史的発展を繰り返し語るのではなく、ヨーロッパについての選択肢をいくつか提示する。

以下の議論の中では、特に、ヨーロッパの形成案について説明する。これらは実現できなかった、またはまだ実現できていない、あるいは部分的にしか実現できていない案である。本論文では、近現代からのヨーロッパの概念を、合計9つにまとめた。ヨーロッパの思想における歴史的順序を無視することはできないが、本論文ではこれらを、時系列ではなくテーマ別にグループ化した。以下、これら概念を可能な限り偏見なく、そして評価的意見を含まないよう並列する。まず、現代におけるEUの発展から始める。

欧州連合の近代発展史について

今日の欧州連合の始まりは、一般的なヨーロッパの同盟政治の伝統に則ったものであった。イデオロギー的な性質の何か、またはその結果というわけではなく、ヨーロッパの政治理論の結果でもなかったのである。フランス、イギリスおよびベネルクス諸国は、悪化していく冷戦と、非軍事化にもかかわらず危険と見なされていたドイツの脅威という2つの理由により、1948年のブリュッセル条約で防衛同盟を結成した。この西方連合は、翌年設立されたNATOに加盟した。当時、欧州統合の取り組みは経済部門に集中しており、ドイツは加盟していなかったが、参加は許可されていた。1951年、ドイツとフランスの石炭および鉄鋼産業を調和させることを目的とし、欧州石炭鉄鋼共同体（独：EGKS、英：ECSC）が誕生した。ベネルクス諸国とイタリアの参加によって、欧州石炭鉄鋼共同体は最初の超国家的権威を形成することとなり、これにより後の欧州共同体の中核であると考えられている。そして4年後の1955年、ドイツはパリ条約を通じて限定的な国家主権を獲得し、ブリュッセル条約（現在の西欧同盟）とNATOに加盟した。こうして、ヨーロッパの東側と西側という分裂が、最終的に定着したのである。



図1 EGKSの創設メンバー¹⁾

1957年、欧州経済共同体および欧州原子力共同体はローマ条約に調印した。1973年にはこれら2つの政治共同体に一部の北欧諸国が参加し、欧州諸共同体となった。ギリシャ、スペイン、ポルトガルの国々は、権威主義体制であったがためにそれまで参加していなかったが、1981年にこの共同体に加盟した。そして1990年代の初め、各国は、欧州経済共同体（EEC）の拡大に対する要望に従うこととなった。この要望は、特にフランスによって1980年代半ばから表明されていたものである。これが1992年のマーストリヒト条約であり、経済通貨同盟としてEUが設立された。1995年、EUはスウェーデン、フィンランド、オーストリアの加盟により、2度目の北方への拡大を果たした。さらに2002年には、現在19か国で使用されている通貨、ユーロが導入された。2004年からは、マルタとキプロスとともに東ヨーロッパと中央ヨーロッパ諸国がEUに加盟している。そして、EUを超国家的組織として定義し、中央的権限を与えることを目的とした2007年のリスボン条約が、2009年に発効した。しかし、条約は妥協案となった³⁾。理由は、フランスとオランダにおける国民投票で否決され、欧州憲法を施行できな



図2 ユーロッパのNATO加盟国²⁾

くなったためである。最後にEUに加盟したのは2013年のクロアチアで、イギリスは2020年にEUを離脱した。現在、ヨーロッパの47か国のうち27か国がEUに加盟している。

可変翼欧州⁴⁾

政治モデル「2速度式欧州」または「多変速式欧州」は、ヨーロッパでの統合を支援することとなっている。これは、欧州連合の加盟国が、必ずしも加盟当初からすべての統合ステップを経る必要がないことを意味する。その代わり、さまざまなレベルの協力が存在しうる。これらの用語は、ヨーロッパが、創設以来2010年の金融危機に至るまでの過ちから学んだことを示すために用いた比較的新しい用語である。欧州連合への加盟国は、最初は特に、法的および経済的レベルで調整されなければならない。これは欧州共同体の設立以来の基本的な考え方の1つである。加盟国間の差異は、特に、財政政策と「再分配」政策によって是正されなければならない。これらの措置は、1987年に施行され、「改革政策（独：Reformpolitik）」というキーワードで知られるようになった「単一欧州議定書」に基づいている。欧州連合の地域政策または結束

図3 段階的統合 (2013)⁵⁾

政策は、欧州連合内の経済的および社会的結束を強化することを目的として、現在約1兆ユーロが再分配されているという事実につながる。しかし2010年のユーロ危機以来、この政策は多くの批判に耐えなければならなかった。個々の加盟国の国民経済の間にはあまりにも大きな差異があることが明らかになり、これらの差異は、国際送金だけでは補えなかったのである。金融危機の際には、同様な先進国は他国よりも緊密に協力しなければならないという、以前からの考え方が再び主流となった。特にユーロ圏を北ヨーロッパと南ヨーロッパの2つに分割する議論が行われた。このように、欧州統合は存続したものの、送金制限が実施されていた。そして「2速度式欧州」のもう1つの代替案は、ベネルクス諸国、フランス、ドイツの大陸ヨーロッパ（独：Kerneuropa）であった。これまでのところ、この考えは合同軍部隊では示されているが、金融政策のレベルでは示されていない。現時点のヨーロッパでは、速度の異なる国々が未だ存在しており、不平等な経済の迅速な比較が期待されている。

現在、ヨーロッパは連合としての地位を確立しているが、ここに至るまでの道のりは決

図4 “Inner Six” and “Outer Seven” (1961)⁶⁾

して短くはなかった。特に1930年代と1940年代には、もう一つのヨーロッパ、つまり国家としてのヨーロッパを代表する有名な人物がいたのである。

国家としてのヨーロッパ「国家ヨーロッパ」

国家ヨーロッパの用語と概念は、イギリスの政治家であるオズワルド・モズレー（1896-1980）に由来する⁷⁾。モズレーは第一次世界大戦後の「保守党」（トリー党）の政治家だったが、1924年にイギリスの中道左派政党の「労働党」（Labour Party）に転向した。そしてモズレーは、その後の政治活動、つまり1932年に「イギリス・ファシスト連合」（英：British Union of Fascists, BUF）を設立したことで、国際的に知られるようになった⁸⁾。モズレーは1930年代以降、西側国を中心とした「国家ヨーロッパ」の最初の概要を展開した。1945年からは「国家ヨーロッパ」の実際の概念を提示し、そのアイデアは35年後に彼が亡くなるまで継続的に発展した。1958年に出版された「国家ヨーロッパ」についてのモズレーの書籍「ヨーロッパ：誠実と計画」（英：Europe：Faith and Plan）の中で、彼は要約して次のように述べている。『「国家ヨーロッ

パ」の目的は、ヨーロッパの人々を平準化や混合化から守る、単一のヨーロッパ国家を設立することである。』当時のモズレーの考え方は、ヨーロッパの内戦、冷戦、そしてヨーロッパの影響力の減少に影響されており、この書籍の方向性は、ボルシェビズムとアメリカニズムの両方に向いていた。国家ヨーロッパは大規模な政治プロジェクトであり、ロシアを除くすべてのヨーロッパ諸国が、イギリスとアフリカのヨーロッパ植民地地域を含めて、力を合わせて結集しなければならなかった。地域や国の特性を維持し、中央政府や中央軍と協力して新しい権力構造を構築しなければならないのだ、と。モズレーによると結局のところ、スコットランド人はイギリスにあってもスコットランド人であり、統一ドイツにあっても、バイエルンの人々はやはりバイエルン人なのである。だがイギリス内では、国家ヨーロッパの思想は、とりわけ若い極右活動家をほとんど惹きつけることができなかった (Macklin 2007)。戦後以降、「国家ヨーロッパ」における「ヨーロッパ社会主義」というモズレーの思想は、ドイツとイタリアの右翼政界に広まった。モズレーの概念は雑誌「国家とヨーロッパ」や雑誌「ヨーロッパ」などだけでなく、モーリス・バルデーシュ (Maurice Bardèche, 1907-1998) 周辺の知識人たちの間でも聞くことができた。しかし、長

年にわたる「国家としてのヨーロッパ」というモズレーの思想は、権利間の問題下で、ますます忘却されていった。そしてジャン・フランソワ・ティリアート (Jean-François Thiriart, 1922-1992) と元弟子らは、モズレーの思想をユーラシア主義的なボックス・ユーラシアティカ (独: Pax Eurasiatica) という概念に発展させたのである。

ユーラシア・ユーラシア主義

ユーラシアとは、地理学的・地質学的には、ヨーロッパとアジアを合わせた大陸のことである。文化史的な意味でのユーラシアとは、アルタイからカザフスタン、ロシア南部およびウクライナを経てドナウ川に至る、ユーラシア草原の先史時代の文化圏を指す。ここでは、特にロシアの哲学者アレクサンドル・ドゥーギン (独: Alexander Geljewitsch Dugin, 1962-) 周辺の知識人によって用いられている、哲学的かつ、今や非常に政治的な用語であるユーラシアについて述べる。ユーラシアの概念は哲学的・地政学的かつ大規模なものである。しかしこれまでのところ、秩序についての具体的な概念はない。ドゥーギンには決定的な理論を提示する意思はなく、議論のために考えるさまざまな大規模な概念を提示しようとしたのである。この概念の集合体は、ロシアがヨーロッパに属しているか否

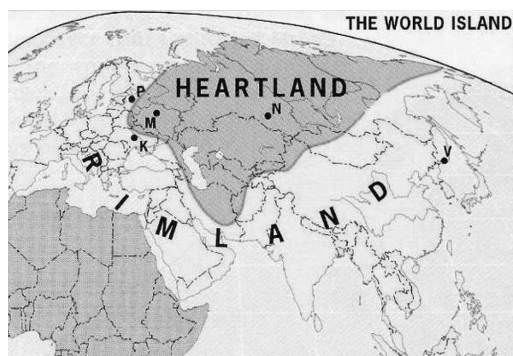


図5 ロシアから見たユーラシア⁹⁾

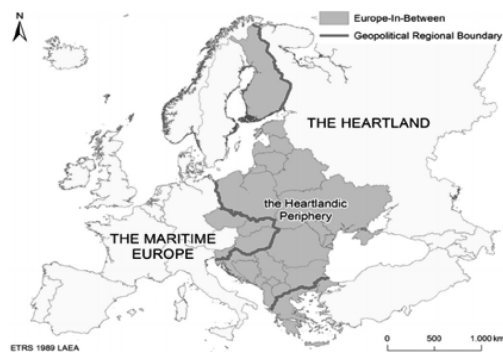


図6 ドゥーギンが見たヨーロッパ中間¹⁰⁾

か、そしてどのように属しているのか、または属していないのか、といった問題と向き合っている。ドゥギンにとって、ユーラシアという用語は形而上学的で精神的な意味合いを持っており、ユーラシアの支持者は、大西洋の西側、つまり地球の反対側にユーラシア地域が存在するという思想を支持している。ユーラシア地域の広さとその構成については、さまざまな考えがある。たとえば、アルメニア、カザフスタン、キルギスタン、ベラルーシ、ロシアで構成されるユーラシア経済連合という考え方がある。ドゥギン自身は時として、ユーラシア大陸の定義をダブリンからウラジオストクまで拡大した。すべての理論に共通しているのは、ユーラシアはヨーロッパとアジアの人々に等しく属し、ロシアは自然な覇権的立場をとっているということである。保守革命の側や社会革命派、左翼国家連合の関係者からは、第二次世界大戦前にすでにユーラシア連邦を支持する声が上がっていた。戦後、ジャン・ティリアルとその弟子カルロ・テラチアーノは、ヨーロッパレベルでユーラシア大陸という概念を提唱していた。唯物論的な無神論者として知られたティリアルは、ユーラシア問題に対して合理的な、そして何よりも地政学的なアプローチをとっていた。彼の最大の関心と目標は、アメリカ、カナダおよび南米を含む、アメリカ大陸に対抗することであった。弟子のテラチアーノは、このような地政学的な結合の精神的な側面について、より深く言及している。彼の考え方は、ユリウス・エヴォラなどの哲学に強い影響を受けており、したがって、反米同盟にはあまりこだわりがなかった。テラチアーノは、ユーラシア大陸の国々が融合することで、経済的繁栄や社会保障だけでなく、何よりもこの地域の人々に一種の精神的な再生をもたらすことを期待したので

ある。このような考え方により、テラチアーノは、首謀者ニコライ・トルベツコイ（独：Nikolai Trubezkoj, 1890-1938）を中心とした、初期のユーラシア大陸について、ロシアを代表する伝統的な立場に立つこととなった¹¹⁾。戦後、ユーラシア大陸の議論に貢献したのは、とりわけエルンスト・ニーキッシュ（独：Ernst Niekisch, 1889-1967）¹²⁾、エルンスト・フォン・ザロモン（独：Ernst von Salomon, 1902-1972）¹³⁾、オットー・シュトラッサー（独：Otto Strasser, 1897-1974）¹⁴⁾であった。また、オットー・シュトラッサーは、中核となるヨーロッパ内の地域市場で有効な「欧州関税同盟」を実現することを目的とし、「中核的ヨーロッパ」という考えを広めようと努めた。

欧州関税同盟と大陸ヨーロッパ

文化用語としての旧来のヨーロッパ概念は、歴史上実在したカロリング帝国の大陸領域である大陸ヨーロッパ（独：Kerneuropa）¹⁷⁾を中心として、現代のフランス、イタリア、ドイツ語圏ヨーロッパ、ベネルクス諸国（史実に基づくアウストラシア）¹⁸⁾に相当するものであった。欧州関税同盟の構想は、オットー・シュトラッサーをはじめとする国民革命派の反体制者たちによって広められ、このアイデアは、何度も修正され、再構築された。当初、中核的なヨーロッパという目標は1920年代に策定され、大陸ヨーロッパ内の地域市場は、ドイツに加えて経済的に関連する国々で構成されることになった。シュトラッサーは、当初、スイス、オランダ、ルクセンブルグ、デンマーク、ハンガリーを包含し、ドイツと共に単一通貨体制をとることを提案していた。シュトラッサーは、核となるヨーロッパが成功すれば、その中心からさらに多くの国々を吸収することができると強調した。そ

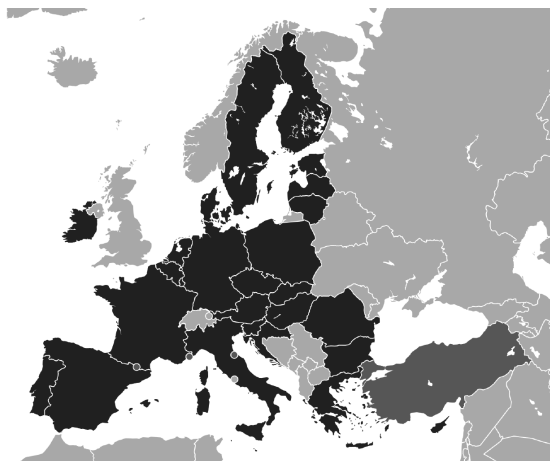


図7 現在の欧州関税同盟¹⁵⁾



図8 欧州本土/本土欧州/(大陸)¹⁶⁾

れは、徐々に成長していくヨーロッパ共同体の原点であり、出発点でもある。長期的な目標としては、ドイツを覇権国とする「ヨーロッパ合衆国」が挙げられていた。

1960年代から70年代にかけて、シュトラッサーの支持者たちは、ヨーロッパ連邦構想を提唱していた。この連邦構想は、その意義と地質学的な規模から、それまで代表的だったドイツ主導のドイツ関税同盟や大陸ヨーロッパと類似している。シュトラッサーによれば、ヨーロッパ民族の独自性を維持し、発展の可能性を保証するのであれば、この連邦は正当なものであるという。シュトラッサーにとって真の多様性とは、「ヨーロッパの美と強さ」である。オズワルド・モズレーやドリュウ・ラ・ロシェルのように、シュトラッサーは国民性を平準化することに対抗する必要性を強調した。したがって、欧州の中核をなす欧州連合は、各国が最大限の行動の自律性を保持するように構築されなければならない。しかし、1945年以前のモズレーや1945年以降のドリュウとは異なり、シュトラッサーは、国民国家が合併して一つのヨーロッパ国家になることは望んでいなかった。

シュトラッサーによれば、各国が連合体を

作ればよい、ということなのである。特にシュトラッサーとモズレーの書簡は、「大陸ヨーロッパ」と「国家としてのヨーロッパ」の違いについて物語っている。

中央ヨーロッパ (中欧)

「中央ヨーロッパ」を地理的に区分できる明確な基準はない。「中央ヨーロッパ」という語は、政治的、文化歴史的、自然的な観点から定義できる。さらにこの語の概念は、歴史的、政治的にも変化する。このように「中央ヨーロッパ」を明確に定義することは困難である。しかし1990年代後半に冷戦が終結して以来、その境界線の問題が再び注目されている。ここでは、第一次世界大戦中に普及し始めた地政学的な概念から考察を始める。「中央ヨーロッパ」は、自由主義政治家フリードリヒ・ナウマン (1860-1919) の同名の著書に基づく地政学的な考え方で、中央ヨーロッパ地域に関する最も有名な思想である。1915年に出版され、ベストセラーとなったこの本の中で、ナウマンは当時の戦争目的に関する一般的な議論を背景に、自由主義的な帝国主義を訴えた。ナウマンの最大の目的は、ドイツ帝国とオーストリア・ハンガリーとい

う2つのドイツ国家の存続であった。この本についての長期にわたる論争は、戦争が始まる前、ドイツでは誰も戦争の目的について真剣に考えていなかったこと、そして多くの人が民族主義派（独：Völkische Bewegung）の大袈裟な要求に同意しなかったことを示している。ナウマンの出発点は、ドイツ帝国はまず経済的に、次に政治的に二重に国家と手を結ぶべきである、という考えであった。そのきっかけは戦争と、ナウマンが提唱した「巨大な経済圏でなければ長く生き永らえない」という事実である。ナウマンは、2つのドイツ国家だけでなく、これら両国を合わせても、生き残るにはあまりにも小さいと確信していた。孤立無援とならないように、長い目で見れば、両国もいつかはイギリスやロシアと一緒にいるしかなかったのだろう。それが「世界的に」共に生きていくための唯一の方法だったのである。ドイツ帝国とオーストリア・ハンガリーの主権は、彼ら自身がこの巨大な経済圏の中心となることによってのみ可能となる。ドイツの関税同盟と同じく、自らが中心となり、より広い範囲を統合する必要がある。したがって、ドイツ全体が一流の経済国家となり、他の中欧諸国も進んでこれに

参加し、独自の世界経済体を形成しなければならなかったのである。ナウマン氏は、ドイツ両国の合併についてのみ具体的に発言し、他の加盟候補については明確に言及しなかった。ナウマンは、新しい中央ヨーロッパの魅力に期待した。各国は自発的に参加することになるだろう。またナウマンは、国家社会主義者の信念に基づき、中欧プロジェクトを人民の問題とすることを望んだ。「中央ヨーロッパ」構想は1914年に生まれた多くの構想の一つであるが、戦争の結果、結局は失敗に終わった。しかし、パリ講和会議において連合国が中央同盟国の講和条件等について討議した際、中欧に政治的混乱が起きたのは、これらの考え方が依然として有効であったからである。

パン・ヨーロッパ（独：Paneuropa）

一時期、「欧州連合」の前身モデルとして最も成功したのが、いわゆる「パン・ヨーロッパ連合」であった。パン・ヨーロッパは、日系オーストリア人の政治活動家、リヒャルト・ニコラウス・クーデンホーフ・カレルギー（1894-1972）²⁰⁾によって提起された。クーデンホーフは1923年にオーストリア南部

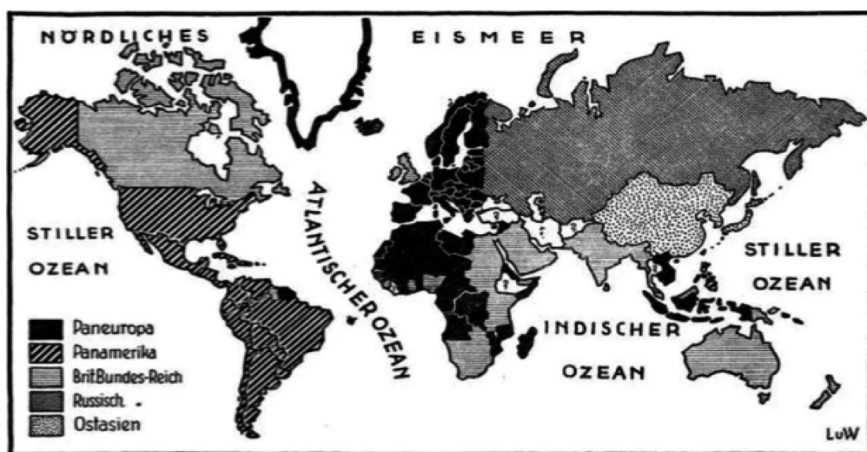


図8 Pan-Europa nach Caudenhove-Kalergi¹⁹⁾

で彼の書籍“Pan-Europe”を執筆した。この本の中心的思想は、ヨーロッパの国家連合の形成であり、三つのステップを経て発展、拡大することであった。第一段階は欧州仲裁条約の締結であり、その後防衛同盟、次に関税同盟が続くことを想定していた。この国家連合は、米国のモデルに基づきヨーロッパのより包括的な統一の出発点となるという考えであった。しかし、クーデンホーフはこの著書の中で、イギリスとロシアがこの連合に参加することに反対の立場を表明している。一方で、ヨーロッパ諸国の海外植民地は統合されるべきだとした。アフリカ大陸の一部が統合されることによって、人口増加による食糧危機の助けになると考えたのである。当時革新的であった民主的な彼の考えは今日まで受け継がれ、彼は現在のEUの創設者および開拓者として認識されている。

ミェンズィモジェ (インテルマリウム)

19世紀のポーランド動乱 (1831年, 1863年) 以降、特に第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけての戦間期には、オーストリアを含むドイツとロシア (ソ連) の間にある東欧および南東欧諸国を総称して、「ミェンズィモジェ」または「インテルマリウム」という言

葉が使われたことがあった²³⁾。第一次世界大戦でそれまで存在した様々な帝国が解体され、戦後東部中央ヨーロッパに次々と新しい国民国家が出現した。ソビエト連邦の建国は、これらの国々にとって危機的存在となった。その巨大な存在に立ち向かうべく、国々は国境を越えて協力しながら政策の議論を開始した。しかし、第二次世界大戦の終戦後、ソビエトは周辺の国々に対する支配行動を強化させ、その結果進みかけていた同盟計画は破壊されることとなった。冷戦後、弱体化したソビエト連邦が徐々に解体される運びとなり、周辺の国民国家は再び独立し、同盟政治は再始動が可能となった。中東欧の同盟の首謀者は、ポーランドの中世の国境を復元しなかったポーランドの元帥ユゼフ・クレメンス・ピウスツキであった。彼の考えは、スラブ連邦を設立し、この同盟に賛同する国々を地中海からバルト海まで広げることであった。ミェンズィモジェと呼ばれるこの地政学的計画は、西はドイツ、東はロシアに対抗することとなった。現在、このミェンズィモジェはラテン語で「海洋間の」という意味のインテルマリウムという名前で続いている。ミェンズィモジェの思想と議論は現在再び活発になってきているが、当時とは少し異なる意図



図9 ミェンズィモジェ²¹⁾

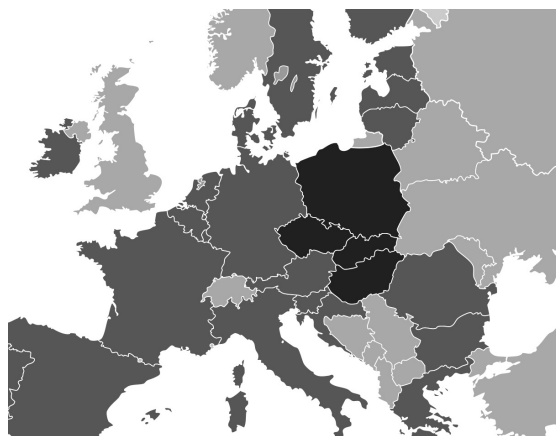


図10 ヴィシェグラード・グループ²²⁾

を持っている。この同盟のほとんどの国はすでにEUの加盟国ではあるが同時に、主にドイツが支配するEUとは別の国際的政治連合の可能性の模索と議論が続いているのだ。実際に、いわゆるヴィシェグラード四カ国の合併を実現している。ポーランド、ハンガリー、チェコ共和国、スロバキアの関税同盟である。この同盟は非公式ではありながらも、EUの傘下に存在し続ける可能性がある²⁴⁾。

締めめの言葉

現在のヨーロッパは、さまざまな交渉や政治的な塹壕戦の結果であり、今回紹介されたヨーロッパに関する概念は、政治的、社会的な議論におけるイデオロギーの多様性を示しています。この多様性の前には、ほとんど一面的な政治的現実しか見えていません。ヨーロッパがこれまで歩んできたすべてのステップは、常に妥協の結果であり、すべての決定は少数派の決定ではなく、多数派の決定でなければならなかったことがお分かりいただけたでしょうか。

集められたコンセプトには、あらゆる政治的陣営の極端なイデオロギーが多く見受けられます。極端な人々も、ヨーロッパの歴史の中で常に発言権を要求し、時には政治の中心に対して多かれ少なかれ影響を及ぼしていたのです。それでも、あるいは、だからこそ、ポジティブな結論を出すことができます：ヨーロッパは政治的、社会的な思想が豊富であり、また常にこの豊富な思想やイデオロギーの戦場だったのです。とはいえ、EUに関しては、ヨーロッパの重要な政治的なステップと歴史的なマイルストーンが、政治的中心の決定に基づいていることは明らかです。しかし、将来はまだ不透明であり、欧州が今後も政治的に行動し変化していくことが期待されるでしょう。

注

- 1) VateGV: Gemeinfrei, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=51402482>
- 2) Patrickneil: Gemeinfrei, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=3996872>
- 3) 条約の正式な名称は次のとおり：「欧州連合条約および欧州共同体設立条約を修正するリスボン条約」
- 4) (独:Europa der zwei Geschwindigkeiten)
- 5) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Multispeed_European_Union_2011.png#/media/File:Multispeed_European_Union_2011.png
- 6) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Inner_Six_and_Outer_Seven.svg#/media/File:Inner_Six_and_Outer_Seven.svg
- 7) 第6代準男爵サー・オズワルド・エーナルド・モズレー（英：Sir Oswald Ernald Mosley, 6th Baronet, 1896-1980）
- 8) モズレーと彼の政治的追従者たちは徐々にファシズムとナショナリズムから目をそらした。
- 9) <https://hercynianforest.medium.com/alexander-dugin-urasianism-and-the-tellurocracy-thalassocracy-distinction-e4478150ea8f>
- 10) Dugin, 2004, p. 5
- 11) 1920年代、トルバツコイは、ウラジーミル・ソロヴィエフの著作などに基づくロシア亡命者の思想的潮流であるユーラシア主義の普及に主導的な役割を果たした。それは、将来の広大なユーラシア大陸の統一において、ロシアが主導的な役割を果たすことを目指したものであった。この運動は、数年後に内部の分裂とソ連秘密情報部の侵入により崩壊したが、1990年代初頭から、新ユーラシア主義者で国家的ボルシェビキのアレクサンドル・ドゥーギンによって復活した。
- 12) ニーキッシュは、とりわけ、青年保守派の首謀者であるアルトゥール・メラウ・ファン・デン・ブルックに影響を受けた。彼は1923年の著作『第三帝国』において、社会主義と民族主義の将来の結合を宣伝し、自由主義の西側諸国、特にアメリカに反発してソ連に向かう、政党なき権威主義のドイツ帝国を目指したのである。ニーキッシュはまた、「ドイツの国家的再生」というプログラムを展開し、ドイツの指導のも

- と、東は中国まで強いつながりを持つヨーロッパを提唱した。
- 13) エルンスト・フォン・ザロモンは、ドイツの作家、脚本家である。作家としては、保守革命に帰結する。代表作は、1951年に書かれた自伝形式の小説「身上調書」(独: Der Fragebogen)で、1945年以降のアメリカ占領地における非ナチ化政策を批判している。
- 14) オットー・ヨハン・マクシミリアン・シュトラッサーは、ドイツの国家社会主義者の政治家である。
- 15) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:EU_Customs_Union.svg#/media/Datei:EU_Customs_Union.svg
- 16) Gemeinfrei, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=1230513>
- 17) 大陸ヨーロッパ(独: Kerneuropa)とは、ヨーロッパのうち、アイスランド・アイルランド・イギリスなど島国を除く諸国であるヨーロッパ大陸諸国を指す。欧州本土または本土欧州や単に大陸とも称する(また「多速度ヨーロッパ」, 「2速度式ヨーロッパ」, 「可変翼ヨーロッパ」とも呼ばれることがある)。
- 18) AustrasiaまたはAustrienは、西の帝国であるNeustriaに対して、フランク帝国の東部を指していた。カロリング王朝発祥の地と言えるだろう。
- 19) <https://prisioneroenargentina.com/index.php/2021/02/28/la-historia-de-la-union-paneuropea/>
- 20) 独: Richard Nikolaus Graf Coudenhove-Kalergi, (日本名: 青山 栄次郎)は、日本の東京で生まれたオーストリアの国際的政治活動家と汎ヨーロッパ連合主宰者。
- 21) Galax Maps, CC BY-SA 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=91967341>
- 22) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Visegrad_group_countries.svg#/media/ファイル: Visegrad_group_countries.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Visegrad_group_countries.svg#/media/ファイル:Visegrad_group_countries.svg)
- 23) 独: Zwischeneuropa, Zwischenmeer, (Intermarium)
- 24) 文字数の関係上、残念ながらいくつかの事項において略述、シャルル・ド・ゴールのド・ゴール主義(仏: „l'Europe des patries“), ギヨーム・フェイのユーロシベリア(独: Guillaume Faye: „Eurosibirien“), ウルリケ・ゲロットの地域のヨーロッパとヨーロッパ共和国(独: Ulrike Guérot: „Europa der Regionen“, „Europäische Republik“)については完全に省略している。